
「ピンキリ」

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ピンキリ」

【Nコード】

N3062F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

ミツチリ・チンチロ・チンチロリンシツカリ・チンチロ・トンコロリンガム公、グミ助、チヨコ坊の3人が繰り広げるコメディイ小説。

「ピンキリ」

ミツチリ・チンチロ・チンチロリン
シツカリ・チンチロ・トンコロリン

関西の商人は、転んでも只じゃ起きない、なんていわれませんが、流れ板つてのも、流れる度にそのお、何かを学んでいるもんです。学習って言葉があります。同じ事を何度やっても、自分勝手なやり方で、同じ間違いをする人を、学習力がないとか言いますが、自分が学ぶべき相手を見失っている、そうなりますよ。

まずは真似る、まねぶ、そして学ぶ、なるほど、納得いたします。千里の道も一歩より。上手い事を言いました。一歩があつて二歩目があるんですから

こりゃもう、今更言うまでもなく、誰でも知ってます。始めが肝腎とか、終わりよければ総て良し、なんて言いますが、始めが良いから途中も良いし、終わりも良いのであつて、途中が悪いのに、終わりだけが良いなんて事はない。

まア、善かれ悪しかれ、始めから終わりまでが一貫しているのが当たり前前、難しい言葉で言いますと、本末究境等と言っていますが、これを保ちたいから、人は言い訳や屁理屈理屈を言う。

しかし、このう、言い訳なんてのは、言えば言うほど、相手は、はアーン、言い訳だなんて、すぐ底を見透かすもんです。懲りを見た、なんて言いますが、身に染みて経験をした事を言うわけで、どうやったら見つからないで万引きをするか、なんてね、懲りない面々もいるようですが、それなりに学習をしている。

経験が無駄にするな二度ない人生。学校の先生や親からよく言われる事ながら、これがなかなか分からない。

流れ板やってたガム公も、話し方に丸みを持ちたい、人から慕われたいと思うのですが、本人が人を好きになれない。愛するという脳のパーツが抜けている。

こうした学習は、もう三つ子の魂百までなんていいいますが、三歳あたりで、決まるそうです。でも、まあ、こんな事を考えている三歳児もいないでしょう。ガム公なんかは、物心ついた頃から、橋の下から拾ってきた、なんていわれて育ったもんですから、その育ちの悪さを知っていますが、隠さず世間を歩いていく。

ですからチヨコ坊なんかのように、嫁ぎ先で苦労して、矛先のかわし方を知った話し方には、憧れる。半年前、外国での流れ板を切り上げ、そのチヨコ坊の所に転がり込んだガム公。チヨコ坊のツウ・ルームマンシヨンの、薄日のさす居間のソファから、窓の外を見ている。

ベランダに置いてあるススキが、あるか無しの風に揺れ、その向この西空に、秋の真っ赤な夕日が尾根にかかっているいい風情。そこへチヨコ坊がスルメと焼酎を持ってきて、赤い夕日にどんな昔が見えているの、なんて気の利いた事を言う。

「焼酎か、癖が無くて、一番いいな」

「お湯で割る、それとも・・・」

「野暮は言うなよ、チヨコ坊と飲むのに、お湯は熱過ぎるじゃねえか」

「エ・・・バカね、溶けちゃうじゃない」七〇年代の高倉健と大原麗子がやったら似合いそうな事を二人でやっている。チヨコ坊がクネット、身を崩してガム公に酌をしようとする、チャイムが鳴った。

「誰かしら、居留守よ。もう・・・」

「見てからでも遅くはねえさ」

「ん、もう・・・」とチヨコ坊、スネ事を言いながら体を立て直し、インターホンの画面を見る。そこにはグミ助が映っている。ったくとか何とか言いながら、顔を見たら文句の二ツや三ツ言ってやろう

と思うチヨコ坊。オートロックのボタンを外す。程なくグミ助が部屋の外に来たんで、ドアを開けると、ヒョイと顔より先に何か突き出る。

「生ハムとメロン、手土産代わり」と声がして、グミ助の顔が出た。ロンドンの板前が、有り難う要らない、金欲しい。なんて言つてた奴がいましたが、心は形に出してこそ通じるようで、チヨコ坊素直に頬笑むいい女。

「おツ、グミ助かぁ、まア、来いよ」と奥からガム公の声がしてチヨコ坊は生ハムとメロンを冷蔵庫に入れ、かわりにペット・ボトルのアイス・ティーを持って居間に行きます。

「久次郎親方は元氣か。どうだその後、お前えは見習いから、見習われてるって気がして来たか」とガム公。

「なんない兄イ、さっそく嫌味かい」とグミ助が顔をしかめますとチヨコ坊が

「そうじゃないのよ、グミちゃん、おんなし事やってれば、いつか人の上になって、責任が出るってことなんだから」

「兄イの話しは、ついてくのがやっつとで、考える暇がねえよ」とそっぽを向いて言うグミ助。

「話とスカートは短い方がいい」とガム公これまたぶつきら棒にいう。

「だから流板やってたんじゃないの、ガムちゃんはさ。ねえ」とチヨコ坊が訳知りに言う。

「なんだか、俺にはさっぱりだ」とグミ助、首をしねって、手酌酒。

「でも、グミちゃん、こうしてガムちゃん帰って来たんだからね」

「こうして帰ってきたって、どうして帰ってきたんだい、兄イ」

「良いじゃない、過ぎた昔は、あら、手土産頂こうかしら」チヨコ坊言うなり、サツと立ってキッチンに行きます。残った二人、どこか気まずく、話の糸口を探し、グミ助が

「何があつたんだい、兄イ」と言えば

「色んな事あつたもんだなって思つてよ。赤い夕日と独り言だ」と

ガム公。

「キザだなあ。そらあ日本に居たって色々あんだから、ましてや外国だもんな。極めつけはどんな事あったんだい」

「ウフ、極めつけ、か」言いながらガム公、俯いてニヤつきます。

「なんだよ、気色悪いな、一人で喜んじやって」とグミ助もつられる。

「なんでも初めての経験てなあ、外国語を始め、人から習う事が多かったって、今更ながら感心してる」と言つてガム公酒をなめるように飲む。

すると間を見たように、チヨコ坊が美味しく冷えた生ハムとメロンを切り分け、艶のあるヘレンドあたりの白い洋皿に美味しく盛つて運んできた。

熱い物は熱い内、冷たい物は冷たい内に、なんて言葉を添え

「昨日より今日、今日より明日、いつも新しい経験じゃないの。さ、冷えてるうちに」とチヨコ坊、甲斐甲斐しく二人にナイフとフォークを配る。

「さすが年増、言うことが違うねえ」

「一言多いんだ、手前えは」ビタツとガム公がグミ助の頭を張つた。「おやめよガムちゃん、片方が多くて、片方が少ない、足して二でわりゃ丁度いいじゃない」とチヨコ坊がなだめる。

「何でえ、嫌味臭え、はしよった言い方をする兄イなんて嫌れえだ、でもよオ、耳に痛くてチクシヨウって思つても、明日に繋がつてんだよなあ、ヒツク、極めつけは何でえ、ホームレスにでも、なつたのか」とグミ助、焼酎で、ろれつが怪しい。

「なつた。ペット・ボトルが水洗トイレよ。生きる知恵のつく、いい経験だった」とガム公アイス・ティーのペット・ボトルをなでる。「なつたつて、兄イ・・・俺、酔い醒めつちまつた。ペット・ボトル・・・が、なんでだよ」

「ペット・ボトルの蓋に小さな穴を開けてな、水鉄砲、紙がいらねえ」とガム公言いながら、ク、クククと照れ笑い。

「居るんだねえ、おんなし女が世の中には、ガムちゃん、もうひとつ、ねえ」とチヨコ坊が肩摺り寄せてガム公に酌をする。

「ケ、見てらんねエよ。おんなし女が居たからって、どうなったんだい」グミ助、ふてて手酌のあおり酒。

とは言つても気になるグミ助。

「・・・チヨコお姉さま、おせえて、ねね」なんて、猫なで声を出すもんだから

「まったく調子のいい酔っ払いだね、いいかい、私とおんなし女がいたって事、忘れんじやないよ」とチヨコ坊が念を押すと

「忘れん、金輪際忘れんから、早く言つてよ」とグミ助すがりつく真似をした。

「ほら、ガムちゃん黒帯じゃない」

「黒帯だあ、兵児帯じゃねえのか」

「空手じゃないか馬鹿。空手の先生の娘がさ、キャラバン持つてて、そこに棲んじやつたつてわけよ」

「それとチヨコ坊と、どこがおんなしなんだ」とわからないグミ助。

「話はこれからのよ、つたく。その娘、ガムちゃんより三十も下なんだけど、なかなからしく、住まいを請け負つたつて事、出来きやしないよ」投げるようにいうチヨコ坊。

「するとなにかい。ホームレスの兄ィにそんなに若けえ娘がくつ付いたつて事か、そんな時、イギリスの奥さんはどうしてたんだい。第一、兄ィここに居るじゃねエか」

「奥さんからは三行半、若い娘は親の持つて来た縁談を受け、ガムちゃんは苦笑いかみ殺しての御帰国だつたつてわけ」

「上手く出来てやがんなあ。ホームレスつたつて、ピンの贅沢だ。

俺にも分けてくれよ、兄ィ」グミ助がガム公に擦り寄ると、チヨコ坊が、昔つから、いい板前には急場を救う陰の女が居るものなのよ、ね。なんて言つてガム公に酒を催促する。

「そんな女、居ねえ俺はどうなんだ」

「見て習つてが、まだ足りねえから削り板。見知らぬ土地で、とぼ

けてやってる地元板、てえげえ独りよがりのドブ板だ」とガム公、焼酎を一気飲み。

「ヨ夕前だのへ夕前、ドブ板なんていう板前さんを支える女、居るかしら」チヨコ坊いって、目の端でグミ助を見るとグミ助の目が点になっている。

「お前えもな、呑む買う打つばかりを真似ねえで、包丁人・久次郎親方をしっかり見て真似て、早くピンになれ」

「ハイ、しっかり真似・・・ますが、包丁人と板前って同じじゃねえのかい」

「違う、よおツく見てりゃ解る」

「兄ィ、俺はピンの下とかキリの上ぐらいにはなつてねえかい」

「手土産にこれ、どうだろなつて金平でも持って来りゃいいが、まだまだキリだ」

ソロソロ一服、アラドッコイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062f/>

「ピンキリ」

2010年10月20日19時23分発行